



Title	国際旧約学会エディンバラ大会に出席して
Author(s)	菅沼, 英二
Citation	基督教学, 10, 30-34
Issue Date	1975-07-10
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/46313
Type	other
File Information	10_30-34.pdf



[Instructions for use](#)

国際旧約学会エディンバラ
大会に出席して

菅 沼 英 二

国際旧約学会⁽¹⁾ (International Organization for the Study of the Old Testament) の第八回大会が一九七四年八月十八日より二十三日まで、英国のエディンバラ大会で開催された。

エディンバラは英国スコットランドの首都で、人口五十万。ヨーロッパでも最も美しい都の一つといわれている。かつて四年近く(一九六七年～七一年)留学した地であり、恩師の G. W. Anderson 教授が同大会の会長を勤めるといふ関係もあり、教授ご夫妻から「再び帰って来るように」との再三のお招きを受け、七月に「第二の故郷」エディンバラへ向った。

エディンバラ大学の旧約学の諸先生方、N. W. Porteous 博士(元・神学部長) / G. W. Anderson 教授 / Robert Davidson 教授(現・グラスゴー大学) / J. C. L. Gibson 博士(古典語学) / 旧友 A. G. Auld 牧師(現・同大講師)等との再会の機会を与えられ、感慨無量であった。

Porteous 博士は御退職後六年を経た今日も大変お元気で、ご自宅に招いて下さり、旧約研究の国際状況やご自身の学問的立場を話され、また、かつてエディンバラに留学された植村環先生、浅野順一先生の思い出をなつかしそくに話っておられた。

本大会の会場はエディンバラ大学の Pollock Hall of Residence で、アーサー・シートと呼ばれる丘に近く、牧草地に群がる羊の群れのみえる長閑な場所であった。

参加者は世界各国から四百名余りで家族連れが多く、なごやかな雰囲気であり、国際交流のよい機会を供えていた。参加者数を分類すると、開催国の英国が一番多く八一名、その他は主としてヨーロッパで、西欧(西ドイツ四名、オランダ二八名、スイス二〇名、フランス一〇名、イタリヤ一六名、ベルギー七名、オーストリア一名)、北欧(デンマーク一五名、スウェーデン一一名、

ノルウェー六名、フィンランド五名)、東欧(東ドイツ六名、チェコスロバキア二名、ハンガリー、ポーランド各一名)、南欧(スペイン一〇名、ポルトガル、ギリシヤ各一名)、また、かなりの数はアメリカ(三七名)、カナダ(一八名)、イスラエル(二九名)で、その外、オーストラリア(五名)、アジア(インド、インドネシア)、アフリカ(南アフリカ、タンザニア)、レバノン、アルゼンチンからの参加者もあり多彩であった。

日本からは中沢洽樹教授(立教大学)、村岡崇光氏(現・マンチェスター大学)と私が出席した。このように今日、旧約学研究の交わりはヨーロッパ中心から世界全体に広がっている。

本大会の始まる前日の八月十七日と十八日に、国際セプトゥアギント研究会(International Organization for Septuagint and Cognate Studies)が開かれ、M. H. Goshen-Gottstein 教授(イスラエル)の「イスラエルにおける七十人訳聖書刊行計画」の講演を始め、J. Barr 教授(マンチェスター)の「ヘブル語聖書の翻訳者たちの読み方のテクニクの諸相」、村岡氏の「ギリシヤ語訳創世記における代名詞の文章論」外、十二篇の研究発表があった。

他方、十八日に、国際マソラ研究会(International Organization for Masoretic Studies)が A. Dotan 教授(エル大学)の議長の下で開催されていた。

さて、本大会は十八日(日)の夕八時から Pollock Hall の大講堂で、会長 G. W. Anderson 教授の開会講演をもって始まった。開会挨拶ののち、ウプサラ大会(一九七一年)以後に亡くなられた旧約学界の指導者 W. F. Albright, R. de Vaux, G. von Rad, Otto Eissfeldt, James Muilenburg⁽²⁾ の諸先生の業績をたたえて追悼したのち、「スコットランドの二人の旧約学・セム語学者 A. B. Davidson と W. Robert Smith」⁽³⁾ について、特に二人の学問的貢献、二人の関係、また、後者の学問的試練、苦難についてのべられ、一時間余りの、感銘深い講演であった。聖書学研究はかかる試練・逆境を克服していかねばならないことを深く思わされた。

十九日からの四日間、多くの講演、研究発表がなされたが、その主なものは、近く、S・V・T のエディンバラ大会版に発表されると期待される。主なものだけをここに紹介する。

十九日(月)の午前の講演は、L. A. Schökel 教授(ローマ)の「旧約聖書の文学的研究に関する解釈学的

諸問題」と、E. Jacob 教授（ストラスブル）の「正典原理と旧約聖書の形成」であった。午後の講演は R. Rendtorff 教授（ハイデルベルク）の「神学者としてのヤールウィスト―五書批評のディレンマ」で、夕方には、M. H. Goshen-Gottstein の「キリスト教、ユダヤ教と現代聖書学」と題する一般講演があった。夜には、エディンバラ大学の招待によるレセプションが Old College の豪華な Upper Hall で開かれ、副学長、J. McIntyre 教授（神学部長）御夫妻を始め、T. F. Torrance 教授（教義学）、H. Anderson 教授（新約神学）等、神学部のみならず、かしい諸先生に再びお会い出来、大変幸せであった。

二十日（火）の午前の二つの講演は、R. Smend 教授（ゲッティンゲン）の「エリヤ」と、R. E. Clements 博士（ケンブリッジ）の「ヨナ書の目的」とであった。午後の研究発表には、中沢洽樹教授の「イザヤ五三・一一の本文修正に関する新提案」がなされた。午後の講演は B. Otzen 教授（デンマーク）の「旧約知恵文学と後期ユダヤ教の二元論的思惟」、E. G. Clarke 教授（トロント）の「タルグムと新約におけるヤコブの夢の解釈」等があり、夕方には、R. J. Williams 教授（トロント）の「エジプトから来た民―エジプト学者からみた旧約聖書」

と題する一般講演がなされた。

二十一日（水）の午前の講演は A. Malamet 教授（エルサレム）の「エジプト・バビロニアの大激動の渦中におけるユダヤのたそがれ」と題するものであった。この後、総会議事が G. W. Anderson 議長のもとで行なわれた。

① ベンタ刊行委員会委員長、M. Black 教授のベンタ刊行計画報告。

② V. T.（国際旧約学会誌）編集委員交替。アメリカ代表委員、H. G. May 教授の後任に、W. L. Holladay と R. E. Murphy を承認。

ローマ代表委員、Castellino 教授の後任に、J. A. Soggin 教授、ドイツ代表委員 W. Zimmerli 教授の後任に R. Smend 教授を承認。

③ 次期大会（一九七七年）の場所と会長の選挙に移り、会場にゲッティンゲン、会長に W. Zimmerli 教授、書記に R. Smend 教授を選んだ。午後は St. Andrews へのバス旅行。エディンバラ郊外にある新しい Forth Bridge を渡り、広々とした牧草地を眺め、古色蒼然とした古都 St. Andrews の大学、神学部（St. Mary's College）、古い大学チャペル、海岸に残るカトリック大聖

堂・修道院の廃墟、世界に有名なゴルフ場の美しい緑、ピューリタンの精神伝統をとどめる清らかな町の雰囲気、おいしいティー、等々。スコットランドの美しい伝統を偲ぶことが出来た。

二十二日(木)午前の講演は、Zobel教授(ハレ)の「初期王朝時代の大ユダの歴史について」と、A. Soggin教授(ローマ)の「古代イスラエルの詩、法典と五書資料PとJ・E」であった。午後の講演は、Gibson博士(エディンバラ)の「ケレトとアカト・テキストにおける神話と伝説」、G. W. Coats博士(レキシントン)の「モーセ対アマレク人の戦い―出エジプト一七・八一―一六の起源説話と伝説」とであった。これらが最後の講演となった。

夕闇の迫る、七時頃から大ホールで閉会晩餐会が開かれた。会長G. W. Andersonの挨拶の後、次期会長に選ばれたW. Zimmerli教授のスピーチと、本大会会長と書記Dr. Rossへの感謝がのべられた。饗宴たけなわの頃、キルトをはいたスコットランドのBag-piperが会場の外を静かに演奏して歩き、その美しい響きは、夕闇にこだましあるいは余韻を残し、いつまでも別れを惜しむようであった。

書物でしかお名前を知ることが出来ない諸先生と直接お会い出来、その人格にふれ、学問の交わりのあたたかさを痛感した。

宿舎で「隣人」の交わりを与えられたMc Hardy教授夫妻(Oxford) その車椅子のお姿が痛しく目に浮ぶ。向かい合わせの室で朝・晩お合いたした背の高い老紳士BernのJ. J. Stamm教授の物静かな姿も印象的であった。

やさしいde Boer教授、親しく話しかけて下さったH. W. Wolff教授、青山学院神学部問題を心配しておられた若いJeremias教授とBaltzer教授(Münchenのご自宅で再会)、等々。

エディンバラの恩師の方々、旧友、教会の交わりの兄弟、姉妹たち、との再会の喜びを胸にひめ、国際旧約学会の親しい交わりに神の祝福を祈りつつ、つきない思い出の筆をおく。

注(一) これまでの大会は次の通り(会場会長)。

1. 1953 Copenhagen, Benzen
2. 1956 Strasbourg, R. de Vaux
3. 1959 Oxford, G. R. Driver
4. 1962 Bonn, M. Noth

5. 1965 Geneva, J. J. Stamm
6. 1968 Rome, R. A. F. Mackenzie
7. 1971 Uppsala, H. S. Nyberg
8. 1974 Edinburgh, G. W. Anderson

注(2)

W. F. Albright (1891-1971. 9. 15, 83)
R. de Vaux (1903-1971. 9. 10. 72)

G. von Rad (1901-1971. 10. 31. 70)

Otto Eissfeldt (1973. 11, 28)

James Muilenburg (1897-1974. 5. 10, 77)

注(3) Prof. A. B. Davidson (1831-1902) は New College Edinburgh の教授で、旧約学の歴史的研究方法を最初にスウェーデンに紹介し、W. R. Smith は弟子の一人であった。著書は次の通り。Introductory Hebrew Grammar (1874)

The Theology of the O. T. (1904)

Commentaries on Job (1894), on Ezekiel (1892)

Prof. W. Robert Smith (1846-94) はヒブライムラ、ボン、ハッテンゲンで学び、後に教会から異端視され、アムステルダムの教授の席から追われ、余生をケンブリッジ大学で過した。主著は次の通り。

The O. T. in the Jewish Church (1881)

The Prophets of Israel (1882)

The Religion of the Semites (1889)

本大会期間中 New College Library に二人の全著書の展示がなされていた。

なお、「国際旧約学会第八回大会」について、次の二書にも記されている。

Prof. P. R. Ackroyd, International Old Testament Study, Exp. T. 86, pp. 150-151, 1975.

中沢治樹「国際旧約学会に出席して」『聖書翻訳』第十号、九一―一三頁、一九七五年。

昭和四十九年度行事報告

○第十三回大会 七月十五日 於・藤女子大学

理事 会

総 会

昭和四十八年度行事・会計・会計監査報告を承認

決議事項

一、新役員として次の各氏を選出。

〔会 長〕 秋田 稔

〔会計監査〕 海老沢義道

〔理 事〕 浅井正三、石沢三郎、伊藤貫一、宇野光雄、大

出 哲、加藤邦雄、佐藤日吉、三原武夫、山崎

保興

〔幹 事〕 雨貝行麿、植木幹雄、宇都宮輝夫、近野 亘、

管沼英二、滝沢武人、土屋 博

二、次期大会は七月十四日(月)、北星女子短期大学において行

なう予定とする。

三、公開講演会は関根正雄氏を講師として招くことの可能性を